

## ブラック・マウンテン回顧録（Ⅱ）

——チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解——

平 野 順 雄\*

Black Mountain Retrospective (II):  
Reading Charles Olson's *Muthologos*

Yorio HIRANO

**キーワード**：チャールズ・オルソン, ブラック・マウンテン大学, 『ミュソロゴス』,  
ジョン・ライス, ジョセフ・アルバース

**Key words** : Charles Olson, Black Mountain College, *Muthologos*, John Rice, Josef  
Albers

### はじめに

拙論「ブラック・マウンテン回顧録」（2014）では、ブラック・マウンテン大学の様々な活動に焦点を当て、ブラック・マウンテン大学は何をした大学であったのかを、時系列にそって、解説することを試みた<sup>1)</sup>。

本稿「ブラック・マウンテン回顧録（Ⅱ）」では、ブラック・マウンテン大学にアメリカ詩人チャールズ・オルソンがどのように関わったかに焦点が合っている。どのようにしてオルソンがブラック・マウンテン大学と関わりを持つようになったのか、そして最終的には学長として、大学を閉校にする措置をとり、法廷論争になった未払い給与問題をどのように解決したのか<sup>2)</sup>、当人の口から語られる<sup>2)</sup>。この先のインタビューをたどる際に、有用だと思われるので、ブラック・マウンテン大学の歴史を3期に分けて以下に示す。

第1期ライスのブラック・マウンテン大学(1933-39)

第2期アルバースのブラック・マウンテン大学(1939-49)

第3期オルソンのブラック・マウンテン大学 (1951-56)

インタビューは、大学が閉じることになった経緯に興味を持ち、法廷争議がどのようにして起こり、解決されたのかに何度も立ち戻る。それによって、ブラック・マウンテン大学の終局の姿が明らかになる。終局面におけるオルソンの態度が、2つに割れているように見える点も興味深い。敷地を失った大学は閉じる他ないという態度表明をする一方で、

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

敷地を持たない大学構想に参画したいという願望も顔を覗かせるのである。

以下、1969年4月に、グロスターにあるオルソンの自宅で行なわれたインタビューを概観する。インタビューアは、マサチューセッツ工科大学の学生アンドルー・S・レイノフ（Andrew S. Leinoff）で、ブラック・マウンテン大学に関する卒業論文を書こうとしていた。

インタビューの内容を主題別に見れば、Ⅰ．ブラック・マウンテン大学の闘い、Ⅱ．ブラック・マウンテン大学の内紛、Ⅲ．ブラック・マウンテン大学の未来、Ⅳ．未来の軌跡、Ⅴ．非所有の原理の五つに分類できるだろう。しかし、インタビューであるから、話はしばしば直線的には進まず、螺旋を描きつつ、真実に迫っていく。その様子を、辿ってみよう。

## Ⅰ．ブラック・マウンテン大学の闘い

### i．終局の選択：出ていくか、倒れるか

オルソンは、ブラック・マウンテン大学を別の場所へ移すという考えには、批判的だった。レイノフのインタビューに答えて、オルソンは言う。

よく考えなくてはいけない。あの途方もない思いつきを——例えば、ポール・ウィリアムズ（Paul Williams）が場所をそっくり移したいと思った時に、誰も不足額を補ってくれないのだという事実私たちが直面した時に、そしてポールが、かなりの金額を提供し、食肉牛の一群を連れてきたばかりか、かなりのローンも組んだ時、彼はブラック・マウンテン大学を一生懸命維持しようとしたのだ。そのために、大学を無傷で北へ、ニューヨーク市から半径250マイルの範囲内に移動したいと考えた——彼の提案の中で一番すごいのは、ニューヨークの摩天楼のビルの中に大学を移そうと考えたことだ——そして、私の言いたいのは、それが適切かどうか分からないということなのさ。（*Muthologos* 316）

### ii．ライスとアルバースのブラック・マウンテン大学

ブラック・マウンテン大学を移動することに批判的なのは、オルソンがブラック・マウンテン大学に惹かれた理由と関係がある。

私はジョン・ライス（John Rice）が設立したブラック・マウンテン大学に惹かれたことを強調しておきたい。そして確かに、ライスを調べれば、彼自身が高度な訓練を受けた古典学者であり、素晴らしい知性であり、彼が教育に揺さぶりをかけていたことが分かる。ライスは、ソクラテスの伝統を受け継ぎ、口頭で教える偉大な教師だったのだ。明らかに、それがロリンズ大学を解雇された理由であったし、ついにブラック・マウンテン大学からも解雇され、追い出された理由だと思われるのだが。

ブラック・マウンテン大学で教えた最後の頃のアルバースは、彼自身が並外れた教育家になっていた。イエール大学でも後に教育家の面を露わにしていたと、私は思う。そして、私自身、ブラック・マウンテン大学での最後の数年間は、教育家だった。（*Muthologos* 316）

ライスとアルバースに惹かれて、オルソンはブラック・マウンテン大学と関わるようになった。ブラック・マウンテン大学は、教育学を中心にする大学で、何か素晴らしいことが起こる場所だった。

私の印象では、ブラック・マウンテン大学の背中や背骨（her back or her spine）になっているのは教育学なのだ。それに、もちろん、我々が全員で心をついて行なった活動がある。600エーカーの土地をフェンスで囲んだのだ。そして、しばしば他の人も言うことだが、そのフェンスを通るとき、アール・キャロル（Earl Carroll）の「ヴァニティーズ」（“Vanities”）にあるこんな歌詞を思い出す「このドアの向こうには、世界一可愛い娘たちがいるのでは」ないか、と。事実、その門となる、低い地面に立った板塀にもう一度塗料を塗ろうとしたとき、アルバースが使っていた正しい白ペンキを見つけるのに大変な時間がかかった。なぜかという、アメリカでは白ペンキの中に汚い黄色のものが入っているのだ。有名な酸の一種でそれを取り除くことはできない——だが、アルバースはこの酸の入っていないペンキを使う術を知っていた。その酸の入っていない白ペンキを手に入れるのは大変難しかった。フェンスの白さは、アール・キャロル・ショーの美しい娘たちのようだった。フェンスを通り抜けると、別の世界に入るのだ。ここで、ブラック・マウンテン大学の有名な印（mark）に注意を促したい。印璽にある奇妙な白黒の的に（black and white target that’s on her seal）。奇妙な印（bindu）は、ブラック・マウンテン大学の大学要覧に載っている（it’s on her catalog）。我々は、今日、印の純粋さと呼んでいる。それは純粋なもので、白と黒の的だ。（*Muthologos* 317）

### iii. ブラック・マウンテン大学の美質：教師の平等

ブラック・マウンテン大学の美質で、まず挙げられるのは、教師間の上下関係がないことである。

オルソン：「教師」とか「学部教授団」などの言葉を避けて、「教育」と言ったとき、私は何かを言おうとしていた。ブラック・マウンテン大学はとてもうまく行っていた。教授の地位というものはなかったし、地位の違いもなかった。ブラック・マウンテン大学の持ち主とは、ただ——あなたが門をくぐった瞬間に、あなたが教授陣の一人になれば、他の教授たちが何年この大学にしようと、それとは無関係に、他の教授たちと同じく、この大学の持ち主になるのだ。それに年金というものもなかった。年金がない事が一種苛立ちのもとになった。アルバースが退職するに際して、こう思ったという、「何ということだ、この大学で20年以上勤めたのに、手元には何も残らず、去っていくとは」。本当に、それが事実だった。先週から働き始めた人がいるとしても、同じことなのだ。しかし、それがまた、素晴らしいことの一つでもある——つまり、開かれていることを本当の意味で語るとすれば、開かれた状態を分け与えなくてはならない。それは値切るわけにはいかない、分け与えなければならぬのだ。

レイノフ：ゴダード大学のハムリン（Hamlin）が言うには、ブラック・マウンテン大

学には、教えることに興味を持つ人たちがいて、それと同様に共同体としての活動に参加したい人たちがいるとのことでした。(Muthologos 317)

#### iv. ブラック・マウンテン大学とは何か

これに答えて、ブラック・マウンテン大学は共同体ではなく、大学だったとオルソンは言う。(以下、本稿の全体にわたって、太字による強調は平野。)

オルソン：ハムリンは共同体の人だということだね。ここは、二番目のものが、一番目のものを出し抜く(encompass)か、一番目のものに対抗するところだ。もしここが大学なら、事実、大学だったのだが——補修大学だった。退職して、亡くなった数学者マックス・デーン(Max Dehn)の代わりを見つけるのは大変だった。私は、プリンストンのレフシェツ(Lefschetz)を訪ねた。彼は私が知っている二人の数学者の一人で、困っていた(helpless)——彼は私に言った「だがね、オルソン、**私が推薦できる最良の人材は、最近ブラック・マウンテン大学を卒業生して、現在、プリンストン大学の高等研究所に勤めている人だ**」。私が言いたかったのは、**ブラック・マウンテン大学の開かれた原理が、どれほどの広がりを持っていたかである。そのことを言いたかったのだ。**

もう一度言うが、その印(bindu)まで考えると、ブラック・マウンテンは大学だったのだ。共同体を意図したものでもなければ、各種作業プログラムでもなく、農場に関連した作業実践でもない。事実、再び設立者の考えに戻れば、とにかくブラック・マウンテン大学は、物を所有してはならないのだ。だから、物を購入した瞬間、ブラック・マウンテン大学は自らを傷つけることになる、それも存在している間ずっと。つまり、ライスにとっては、自分が関わり、その良さを信じられるレベルの教育活動を行うには、借りのが最良の原理だったのだ。

レイノフ：すると、別の疑問が出てきます。ライスの動機のいくつかを問うような疑問です。私はただ、はっきりさせたいだけです。また、**あなたがブラック・マウンテン大学にいた頃、その場の精神は何だったのかも**うかがいたい。ライスが永続的でない場所(a place of impermanence)を望んだかどうか、についても私は確信が持てずにいます。(Muthologos 317-18)

#### v. 最終局面での選択：倒れるか、出ていくか

所有しない、という創設者ライスの考えに基づいて、オルソンはこう語る。大学が立ち行かなくなったら、別の場所へ移動するのではなく、今ある場所で倒れるに任せるのがよいのだと。

オルソン：私は、ライスが土地を所有しないことを望んだと思う、所有しないことに大きな意味がある。ポールがブラック・マウンテン大学を北へ動かそうとしたときに、私は言ったんだ。「張り付いている場所で死なせればいいじゃないか。なぜ、動かそうとするんだ？ もし大学が、どうしても動かざるを得ないことになったら、今ある場所で倒れるに任せばよいではないか。」だから私はブラック・マウンテン

大学から去るための荷造りを終えた日に、君に電話で言ったのだ。私は思った——目に見えるのはいくらかの草と一本の茎、それがすべてだと。残ったのはそれだけだった、と。言いたいのは、ブラック・マウンテン大学は、そういう物と一緒に始まったということだ。毒ヘビの巣のそばに生えていた一本の茎や、野生のアスバガスとともに。

君に言ったように、ブラック・マウンテンは私の心にとっては、過去のものであるだけでなく、未来に掲げられている旗で、まだ降ろされてはいないのだ。私はセンチメンタルでないから、ブラック・マウンテン大学にもう一度莫大な資金援助をしようという申し出を2度断った。1度目は、ビートニック運動がカリフォルニア州ヴェニスで最初に爆発的広がりを見せたとき、お金を手に入れたかつての若い同僚が、巨額の資金提供を申し出たのだ。実は3度あった。もう一つは、私がウェズリアン（Wesleyan）大学に求めた6桁の途方もない金額だ。ウェズリアン大学の面々は、ブラック・マウンテン大学を、エイブラハム・リンカンの小屋（Abraham Lincoln's cabin）のようなものに改築し、記念の建造物に造り変えようとした。そして3度目は、最近で、場所はヴァーモント州かニューハンプシャー州なのだ。そのこのフランクリン・ノッチ（Franklin Notch）とかいう所が候補に挙がっていた。私はよく知らなかったのだが、ほかの所がよいと思った。それで、「いやだな、忘れてくれ」と言った。

われわれが一通り意見を求められた後——クリーリーと私は、バローズ（Burroughs）やトロキー（Trocchi）とほとんど同意見だったのだが——私はその運動にかかわらなかった4人の1人だ——その運動は、トロキーのシグマ運動<sup>3)</sup>はロンドンとアムステルダムで展開されていた。

レイノフ：シグマ＝トロキー運動（Sigma-Trocchi movement）とは何なのですか。

オルソン：それは、最大の運動だった——現在の観念を形成するためのね。そして実際、シグマ運動は、後期のブラック・マウンテン大学の運動と結びつくものだった。（*Muthologos* 318-19）

#### vi. ブラック・マウンテン大学の戦い

ブラック・マウンテン大学の戦いがどのようなものであったのか、レイノフとオルソンのやり取りを聞こう。重要だと思われる箇所は太字で強調した。共同体としてのブラック・マウンテン大学とは何か。その戦いとは何か。オルソンが学長兼オーナーになったのはどうしてか。なぜブラック・マウンテン大学を閉じたのか。詩人ドーンとクリーリーのこと。都市としてのブラック・マウンテン大学の魅力が、語られる。

オルソン：いいかい、共同体を生きることと考えるなら——どんな人間にとっても毎日の問題で永遠のものだよ、動物にとってもそうだ、鳥や花もただ生きている、そうだね。この上なく不毛で退屈な意味でね。それで良い。それが、共同体の本当の意味だ、分かるかい。つまり、君は何をしようとも、二番目のものから逃げ出そうとはしない。膨大な時間を使わなければならないとしても。だから気を付けて話そう。君の言うことは、人生にたいして猛烈な準備をして臨む、別の種類のアメリカ

人の言葉のように聞こえる。汚れた、汚い、社会学だよ、階級などではなく、幼稚で、泥のような。しかし、同時に、思春期を過ぎると、どの時点でも我々は、何物にもなれなくなる。社会学に関わらなければならないとするとね。われわれがトップになるなら別だ。他の人に対してね、他の人がなんであろうと。つまり、食べる、眠る、生計を立てるといったことは、別のことをしなければならない。だから言うのだ、ブラック・マウンテンについては、誰の言うことにも惑わされてはならない。

偉大なことの一つは、ブラック・マウンテンの戦いである。生きることをめぐる(living)戦いだった。まるで、常時、戦闘がなされているようだった。ワートルローから5マイルか2マイルか、1マイル離れたところにどの作家がいようと、「戦闘が行われているのを知っているか」と誰かに聞かれると、「邪魔するな、私は忙しいのだ!」と答える、という具合だった。本当にそういう風だった。いつも戦いがあるのが普通だった。それが、ブラック・マウンテン大学の良さを信じる理由の一つだ。ブラック・マウンテン大学は、パリ大学やボローニャ大学のように健康だったのだ。

そして我々はソクラテスのいたアテネの状態を知っている。ソクラテスは、市によって裁判にかけられ、有罪判決を受けた。おなじみの処刑がなされたが、広場(agora)にとっては、邪魔もの(nuisance)だった、市場では厄介もの(a bother)にすぎなかった。ジョン・ライスは市場では厄介ものだった。だから私は、ブラック・マウンテン大学が、この国家全体のなかで唯一記憶すべき厄介ものになることを期待している。なぜなら、実際、ブラック・マウンテン大学は、これまで提示された額の中で一番少ない金額で大いに活動しているからだ。

最後には私は朝鮮戦争従軍特別手形(the Korean Bill of Rights)も受け入れることにした。政府は、アメリカの兵士に50年代に——年間850ドルを与えた、朝鮮戦争に行った者に。ブラック・マウンテン大学は、それを受け入れた。すべてをそのお金で賄った、食事、衣服、住居、教育、住む家や寮、そのすべてを850ドルで賄ったのだ。今のアメリカの教育制度の下では、そんなことは不可能だが、その当時はできた。できただけではない。われわれは、手形をすべて支払っただけでなく、もうけも出せたのだ。ブラック・マウンテン大学の資金ができたので——大学が独占権を主張できた。独占権の主張をしたのは私であり、私が葬儀人であった。設立時の弁護士によれば、私が唯一のオーナーであり、ブラック・マウンテン大学の諸問題を解決するための理事、いや権利財産譲受人だった。ノルマン法の下での正確な名称は、債権者たちの利益を守る権利財産譲受人(Assignee for the Benefit of the Creditors)である。

考えてみたまえ、他に債権者はいないのだよ。信じられないことだ。大学の敷地こそ、なくなった。理由は、教師たちの中に年老いたものや怖くなったものがいたからだ。私たち若い者は身体を張り、家族のお金を使い、850ドルで教育を与えた。我々はうまくやれたのだ。1956年秋には、10,000ドルのお金を現金で銀行に預けたし、新しくなった教授陣の下へ、昨年より多くの学生が入学してきた。しかし、私たちは大学を閉じた。なぜなら、ある意味で、私たち二人だけになったから——財務係のハス(Husss)氏と私だけになってしまった。私は、すべてのことを処理して、



打ちのめされていた——私たちは、本当に続けたくなかった——私たちは十分やったと思う、これで終わりだと。つまり、私たち二人は、いろんな目にあった、そして、これで終わりだと思ったのだ——1956年のことだ。その時、ブラック・マウンテン大学は23歳になっていた。そして1956年は、世界中でギアが大きくシフトした時代だった。ブラック・マウンテン大学は、現在のウバンギ族の舌だった。過去に向かって垂れ下がっている舌だった。そして、いま、現在は、始まってから10年から15年になる。もっと興味深いものになってほしいものだが。いつも私が考えるように、現在は面白い。

しっかりとっておく。私はドーン（Dorn）のように正確に書ける作家にいつでも感銘を受けてきた。ドーンはブラック・マウンテン大学の学生であった。彼は創作科を卒業し詩人として、小説家としてアメリカ文学の世界で相当な能力を発揮している。素晴らしい小説『ショショニ族』（*The Shoshoneans*）と詩『拳銃使い』（*Gunslinger*）の作者である。1960年にはデヴィッド・オスマン（David Ossman）にインタビューを受け、その結果が『気難かしい芸術』（*The Sullen Art*）という本になった。本のタイトルはディラン・トマス（Dylan Thomas）が詩を指して言った言葉だ。いま行なっているような、録音テープを使うインタビューもある。ドーンが学生だった時、ブラック・マウンテン大学がどういうところだったかが、そこには書いてある。他の人ならぼんやりとしか語れないことを、ドーンのような感受性を持った人なら表現できるのである。

もう一人の詩人クリーリー（Creeley）は、ブラック・マウンテン大学の学生だった私の妻に、尋ねた。「あなたは何のためにここにいて、はっきりさせるため？」はっきりさせるためというより、はっきりした自分になるため、という意味だ。

教育と個性を結びつけることに私は力を入れた。この二つの流れは、一日のあらゆる活動に浸透していた。危険なのは、ブラック・マウンテン大学を、共同体の問題や共同体の秩序の問題として考えようとする傾向のあることだ。ブラック・マウンテン大学は生きることだ（*it's a living*）。だから、どこへでも行くことができる。自分たちで組織した、もっと興味深い、もっと価値のあるところならどこへでも。レイノフ：ブラック・マウンテン大学については、人々が書きたいように、書けばよいと思います。そういう物の中から、私は、歴史の概念を取り出すことができると思います。

オルソン：ブラック・マウンテン大学は、永遠の中のごく小さな点でしかない。とはいえ、永遠の中のごく小さな点なのだ。我々の時代で、比較はできない。

レイノフ：徹底的に話してよかったです。私は、この件に関して繊細さを欠いていたかもしれません。あなたは、ブラック・マウンテン大学を小さな点と仰いましたが、そうではありませんね。ブラック・マウンテン大学にあなたは、全てを投入なさいました。

オルソン：全てがそこにあったのだよ。白い門の中に。

レイノフ：そしてブラック・マウンテン大学の中には、あらゆる多様性があったのですね。

オルソン：その通り。だが、その多様性は、ブラック・マウンテン大学にいる人々の

多様性だった。

レイノフ：そうですね。

オルソン：我々は皆、競争していた。そうしなくてはならなかった。このアメリカ合衆国では。ハーヴァード大学やイエール大学やプリンストン大学以外の多くの大学について話す必要がある。事実、プリンストン大学は独立革命に向かっていた。プリンストンの初代学長は、ジョナサン・エドワーズ（Johnathan Edwards）だった。独立革命以前は、大学の数はわずかだった。この国に大学教育が広まったのは、独立革命の結果だ。コロンビア大学建学の精神全体の中で「人文学」や「生きること」という語を調べてほしい。さて、ブラック・マウンテン大学は——ライスの言葉で言うと、「より一般的な科目では芸術をカリキュラムの中心とする」（the arts shall share the center of the curriculum with the more usual studies）によって、エンジンにガソリンが注入された。

今話していたことから離れたようだが、そうではない。というのは、私がとんでもないことを考えているからだ。つまり、ある社会（society）が興味深いものであれば、その中に全てのものを持っているが、それは容易なことである。なぜなら、それが本当の都市だから、[都市]国家という意味において、あるべき意味において、古い時代の国家においてそうなのだ。

私はアメリカ社会と政府を非難している。ブラック・マウンテン大学にあった強化原理（intensification principle）を欠いているからだ。ブラック・マウンテン大学では、学内にいる全員に強化原理が働いていた。換言すれば、社会的なもの（the social）がすべてだった。探求や努力や他人への提供は、意図的ではなく、動機であり、起こることなのだ。起こるという点で活発だった（active）、ダイナミズムであり、ダイナミックだった。

レイノフ：教授陣の中からあなたは選択的に人選していますが、それによってあなたは、重要な点を、闘いを回避しています（you bring across the point, the above struggle）。どんな読者にも、そのことが明らかに分かるようではなければなりません。

オルソン：ああ、そうか。私はブラック・マウンテン大学の身体の分厚さに十分な信頼をおいていた。皮膚の厚さではなく、海岸のそばのあらゆる育ちゆくものから成る有機体（organism）としての初期ブラック・マウンテン大学の厚みだ。ある程度のスペースは、海岸のそばに育つものによって占められていた。その有様が想像できるだろう。その有機体の靈魂（animism）は、自分の存在を宣言していた。確かにそうだ。だからどうでも良いのだ。私は、ブラック・マウンテン大学に捕らわれた人間だ——なぜかという、私は生涯、教育に携わってきたからだ、私が捕らえられるのは、教育以外にない。

この機織り機（textile machine）は、私を捕えた唯一のものだが、それは、ウェズリアン大学やイエール大学で教育を受け、後にクラーク大学で教え、それからハーヴァード大学へ戻り、最後に専任教授としてニューヨーク州立大学バッファロー校へ来た、そういう経歴と真っ向から対立するものだ。確かにこういう経歴なのだ。それにマサチューセッツでは、州のエクステンションでも働いたし、ウースターの市立高校でも働いた。それぞれの場所で全力を尽くした。仕事から言えば、私は明



らかに教師なのだ。けれど、小さなスカンクの穴があって、その名をブラック・マウンテン大学といった。そこが唯一本当に私を惹きつけた場所だった。その大学の香気が私を魅惑した。実に多くの人がブラック・マウンテン大学のことを君に語るだろう、魅惑されたときの不思議な感情を「おお、これだったんだ！」と。(Muthologos 320-25)

## Ⅱ. ブラック・マウンテン大学の内紛

内紛には、学生が教師に対して辞職を迫ったものと、教師の妻たちが大学を給与未払いで訴えた法廷闘争との二つがある。まず、学生が教師に辞職を要求した事件を見よう。

### i. 学生がドライアーの辞職を要求した

この事件をオルソンは次のように語る。二人のトップが大学から去ることで、大学が変わるものになった。この事件は、オルソンがブラック・マウンテン大学に関わり始める1948年頃のものである。

オルソン：ブラック・マウンテン大学での学生の反抗では典型的なことだが、学生が実際に数学の教師テッド・ドライアー（Ted Dreier）の辞職を求めた。数学の教師としてのドライアーを批判する根拠はあったかもしれない。だが、ドライアーは長い間、大学の財務を担当してきた。ブラック・マウンテン大学のようなところの帳簿などどうしてつけられよう。しかし、学生たちはドライアーの辞職を要求し、ドライアーが辞職したとき、アルバースは言った、「では、私も辞職する」と。学生たちの反抗は行き場を失った。ドライアーとアルバースは良心的な人物で、ブラック・マウンテン大学をなんとかして生き延びさせようとしていた。会議があった——その時、MITから来た学部長が……

レイノフ：バーチャード（Burchard）ですか？

オルソン：バーチャードがやって来た。それにボストンから特別研究員も来た。それに5～6人の教師たちの中に一人、大変魅力的で興味深い女性教師がいた——とにかく、素敵な人たちだった。いいね、とアルバースは低い声で言い、彼らは一週間の会合を開いた。私は月に一度、ワシントンから5日間教えるためにやって来た。(Muthologos 325-26)

### ii. 残った14人の教授陣

アルバースとドライアーが去るに際して、オルソンをブラック・マウンテン大学に正式に迎え入れ、再建の中核になるよう依頼した。ただし、学生はいず、教授陣はわずか14名だった。その様子をオルソンは、次のように語る。『人間はみな兄弟』は、日本では『水滸伝』の名で知られる豪傑たちの奮闘記である。オルソンを含むこの14人が、アルバースとドライアーが去った後の第三期のブラック・マウンテン大学を稼働させるのである。

そして、アルバースは本当に私に頼んだのだった。突然、展望が開けた、最終的に教

授陣は14人になり、学生はいず、ブラック・マウンテンはなくなる。私は言った、「それではまるで……」, 私は、[パール・] バック嬢が『人間はみな兄弟』(*All Men Are Brothers*)と翻訳した、偉大な中国の小説を思い出していた。毛沢東が常に覚悟を決めるときに読んだ本だと、私は聞いていた。それは素晴らしい本だった。なぜなら、官吏の中国、すなわち中華民国が、彼女の「バック嬢の」最も価値ある教師として、突然何の役にも立たなくなる瞬間を描いた本だからだ。皇帝に剣術を教える師範や、宮殿の格闘技指南、偉大な高級売春婦が、不要になったように——だから、本当に社会に貢献できる人々が、道端に投げ出された。そして、皆が西へ向かった、毛沢東の一行が有名な長い行進をしたように。小説は、偉大な中世の話に似て、ボッカチオかチョーサー風である。巡礼はバラバラになりながら、どこへともなく進んでいく、とにかく西へ。そして、職を持たない奇妙な一行は、進むうちに、互いに出会い、話の糸とも筋交いともなって、小説終盤では、延安のようなところへ着く。その素晴らしいところは、最終的に全員が一緒になるところである。私は言いたかった、14人が山の中で取り残されて、何が悪いのか、と。

私がブラック・マウンテン大学に行った最初の年が、このような有様だったので、私はこの大学に情熱を燃やしたのだ。その年(1949年)の大学の状態は、基本的に創立当時と同じだった。何が悪いのか? という奇妙な感情を私は抱いていた。この国で14人の仲間がいるのは、素晴らしいことではないか——少なからぬ集団とも言えた、教授陣であったが、共同体(society)のような、奇妙な人間たちの小さな集団だった、共同体のようなと彼らは言った——私は、彼らに言った、一旦教授陣になったのだから、共同体というのは素晴らしいと。私はかなり酔っていた。地に足がつかないような心地で、丘を降りたものだ。だが、私はこう言ったのを憶えている、「14人、14人で何がわるいのか、ここから何が生まれるか分かるかい、分かるのかい?」。そして奇妙なことに、資産差し押さえ(arrestment)の動きはこの国にとって重要だが、ブラック・マウンテン大学の動きにとっても、今日に至るまで重要なものになった。ブラック・マウンテン大学は、この先、さらに8年か9年続くのである。それは、国の側から考えても、少なくとも、世界的に考えても、興味深いことだった。(Muthologos 326)

### iii. ブラック・マウンテン大学の在り方

オルソンは、あるべきブラック・マウンテン大学の姿を語る。そこには、将来像も含まれている。

オルソン：ブラック・マウンテン大学は、教育機関(institution)だ、共同体(society)でなければ。我々はブラック・マウンテン大学を共同体と見なければならぬ、そうでなければ大学は我々に何をしてくれるだろう。ブラック・マウンテン大学にいたときに、「カワセミ」("The Kingfishers")を書いた。堤に掘った穴に卵を産み付けるところがカワセミの特徴だ。卵を産み付けるのだ! 学生たちよ、肥沃であれ! 地上で、土の中で肥沃であれと考えたのだ——共同体は、2本の足がなければ立つことができない。2本の足が。歩き、話し、動く2本の足が。

事実、最終的なブラック・マウンテン大学構想は興味深いものだった。その構想は当時23歳の織り手（weaver）トニー・ランドロー（Tony Landreau）が立案した。一目見て私が雇った男だ。ランドローは、移動するブラック・マウンテン大学という素晴らしいアイデアを提示した。大学がその時どこにあらうと、どこへでも移動できるのだ。素晴らしいアイデアだった。私は、その考えに賛成だった。音楽家のヴォルペ（Wolpe）は、大学が動いたら、どこにいればよいか分からないので当惑した。気持ちは分からないではなかった。だが、私は言った、「誰かが動かなくてはならない——あなたは望まないなら、家に留まることができる——そしてどこだろうと、われわれのいる所へ来て加わることもできる」。事実、大学は閉校になっても、その意味で、我々はとても裕福だった、最後の理事会で、私に与えられた指示は、ブラック・マウンテン大学の困難を解決して、大学の将来を考えよというものだった。将来の像はすでにできていた。（*Muthologos* 328）

#### iv. 将来像

ブラック・マウンテン大学は、将来、移動大学として、劇場として、『ブラック・マウンテン・レビュー』（*Black Mountain Review*）の発行元として、個々の教師の才覚によって生きていくことになる。その最大の理由は、恒常的財政難である。そのため、教師陣も職員も経済的・精神的安定感を持っていないという宿命にあった。

大学の一部は、移動大学とし、他の部分はサンフランシスコで劇場を開く。『ブラック・マウンテン・レビュー』はよく知られた文芸誌になってきた。ブラック・マウンテン大学の企画が実ったのだ。アーティストや画家はニューヨークにいた、ダンス、音楽も行なわれた。それに私も8週間にわたるプログラムに参加した。サンフランシスコの美術館では、ブラック・マウンテン大学劇場がダンカンの劇を上演しており、私もチケットを買って入った。ブラック・マウンテン大学の活動は、もう十分だと考えた私とハスによって停止させられたのだ。

レイノフ：しかし、分からない。10,000ドルあって、教授陣もいたのですよね。

オルソン：新鮮で活発な教授陣だった。

レイノフ：それに何が起こるのかとびくびくしている老教授陣もいた。

オルソン：数人はね。だが、それも仕方なかった。そういう人たちは寡婦だったし、きつかった。そしてブラック・マウンテン大学では、安心していられなかった。年金の基金もなかったし、どんなテニユア（終身在職権）もなかった。いや、絶対のテニユアはあった！（笑う）在職する限り、給与はもらえた。（*Muthologos* 328-29）

#### v. 付随する給与

存在しないものが、概念化され、名称を与えられると、給与の一部として考えられるようになった。そして、ありもしない付随給与の支払いを求めて訴訟が行われたのである。法廷闘争と呼んだものは、給与に関連する用語の不適切な取り扱いに端を発する。

1950年に生じた不幸な出来事は、アルバースとドライアーが去った一年後に、

起こった。それまでこの大学にいたことのなかった人々が、将来のことを考えて、「付随する給与」(“contingent salary”)のことを書きだした。ブラック・マウンテン大学は、共同体だから、生活するための全てを提供する。住宅、あらゆる人への食事、給与、少ないが、全員が同額を受け取る、というものだ。マウント・オリヴェット大学が解体して、二人の優秀な教師がやって来た。人類学者でレーザー (Leser) というドイツ人と言語学者のフローラ・シェパード (Flola Shepard) だ。

レイノフ：ネイサン・グレーザー (Nathan Glazer) ですか。

オルソン：いや、ポール・レーザー (Paul Leser) だ。他の人も来た。寡婦で年若いていた。だが、他の大学へ行くにしても、どこかの大学で教えたという強みが欲しかったのだ。ブラック・マウンテン大学では、給与は、他の大学と違って、教えた分だけ与えられた。「付随する給与」が危険なのは、紙に書いただけのものが、「負債」のように見えるからだ。(Muthologos 329-30)

#### vi. 三つのブラック・マウンテン大学

オルソンが学長になってからのブラック・マウンテン大学は、次のような成果をあげた。

ブラック・マウンテン大学は、翌年は立ち上がれないのではないかと心配されたが、翌年は立ち上がり、その後5年も6年も7年も続いた。だから、ブラック・マウンテン大学は、三分の一だけ寿命が延びたのだ。どのようにして、また何度、ブラック・マウンテン大学が生き返ったのか、私は憶えていない。創立されたブラック・マウンテン大学、ドライアーとアルバースのブラック・マウンテン大学、そして私が舵を取った最後のブラック・マウンテン大学。どのようにブラック・マウンテン大学を考えればよいかわからないが、三つの形態で考えられる。30年代、40年代、50年代である。ハスが優れた会計士で経営陣の1人だったから、負債として支払われた給与には、税金がかからないようにした。それが、典型的なブラック・マウンテン大学の配慮で、私はそれを愛した。とはいえ、そういう給与は実質的にはゼロだった。だが、結局、会計監査が行なわれて、56,000ドルが支払われた。一人の老人と一人の中年と一人の若い女性が付随給与に関してブラック・マウンテン大学を訴えたことがあった。私は、バンコム郡法廷 (the Buncombe County court) に出廷しなければならなくなった。

アッシュヴィル (Ashville) の若者は法廷が何をしているかを私に伝えた。彼は「付随給与とは何ですか」と聞いた。私は14枚にもわたる手紙を書き、法廷が納得して、この件に片がついた。これは大切なことなのだ、ブラック・マウンテン大学創設と同じくらい大切だ。(Muthologos 330)

#### vii. 閉校後の義務

大学を閉校する場合、学生の成績をどうするかを、考えなければならない。その件でドライアーのおばが、よい提案をしてくれた。

オルソン：ただ、キャサリン・ドライアー (Katherine Drier) が最後にきわめて実直に私に言ったのは、「あなたは、成績証明書をどうするつもりなの、学生の成績は？」

だった。「それは難しい問題だ」と私は答えた。単科大学や総合大学の問題は、有用でなくなったとき、やめるべきだという考えがないことだ。なぜ終わった物をやめてはいけないのだ？ それがブラック・マウンテン大学に対する私の態度だった。ともかく、**ブラック・マウンテン大学は、終わったとき、活動をやめた。**本当にあらゆることが終わったあとに残ったのはこの問題だった。学生の成績をどうするか。その当時学生は、まだ20代か30代だった。40代半ばのものはいなかった。それは、学生たちの成績をいつでも閲覧できるようにオープンファイルにしておかなければならないことを意味した。幸い、ノースキャロライナ州のアーカイヴがブラック・マウンテン大学の学生の成績を保管してくれることになった。学生の成績証明書も必要なら発行してくれるそうだ。

レイノフ：バンコム郡にもどりましょう。

オルソン：そうだな。(Muthologos 331-32)

#### viii. 訴訟を起こした三人

驚くべきことに訴訟を起こしたのは、創設者ジョン・ライスの元妻ネル（Nell）[愛称ネリー（Nelly）]、物理学者ナターシャ・ゴルドウスキー（Natasha Goldowski）、写真家ヘイゼル・ラーセン（Hazel Larsen）の三人で、後にブラック・マウンテン大学に骨をうずめた二人の教授マックス・デーネ（Max Dehn）の妻とジャロヴェッツ夫人（Mrs. Jalowbets）が加わった。

レイノフ：三人が未払いの給与支払いを訴えたのですね。

オルソン：三人だったが、終わりの頃になると教授の未亡人が二人加わった。おずおずと、しかし恐怖も感じていた——希望も。教授は二人ともブラック・マウンテン大学で死んで、その地に埋められている——マックス・デーネの妻と、ジャロヴェッツ夫人だ。彼女たちの夫は、音楽の教授だった。40代か30代だった——二人の妻は、訴訟に加わった。彼女たちがそうしたのは、寡婦だったからだ、それに人生の終わりが近かった。それで、五人が訴えることになった。訴えた中の三人に、創立者の元妻ネリー（Nelly）も入っていた。彼女は、ブラック・マウンテン大学の図書館員になっていた、物理学の教授で大学の経営陣に入ろうとしたものもいた。1950年か、1949年のことだ。

レイノフ：物理学の教授だったのは、誰ですか。

オルソン：ゴルドウスキー、ナターシャ・ゴルドウスキーだ。彼女はアルフレッド大学に移った。三人目は写真家で、最も若いヘイゼル・ラーセン。実際に訴えを起こしたのは、この三人だ。一学期分の給与をもらっていないとして、訴えた。給与が支払われないことなどいくらでもあった。私だって、支払われていない給与は山ほどある。だが、この三人は、付随給与も支払われていないとして訴えた。それで、ブラック・マウンテン大学の背骨は折れた。その結果、法廷の命ずるところに従って、ブラック・マウンテン大学の土地を売却し、負債を支払うことになった。

レイノフ：二人の寡婦が付随給与の支払いを求めたのは分かります、他の三人は……

オルソン：彼女たちが訴えたこととブラック・マウンテン大学の在り方との関係は、



確かにある。アルバースがかつて私に言っていたのを思い出す。「おお、我々は一年に500ドル手に入れたぞ!」と。500ドルは当時の30代の人の年収だった。朝鮮戦争へ行った者に与えられる復員兵大学教育資金（GI Bill）で教育を与えようとした。朝鮮戦争復員兵の大学教育資金が850ドルなので、その金額は、あらゆる学生にとっての学費のすべてになった。食費、住居費その他がそこに含まれていた。学生がお金を払えば、ブラック・マウンテン大学はお金のかかる大学になる。学生がお金を持っておらず、学生だと主張すれば、ブラック・マウンテン大学は学費ゼロの大学になる。そういうバランスがある。問題の三人の女性は、「自分を馴らすことができなかった」のだ（笑う）、私のように寛容には。

レイノフ：ほかの二人は新人だったけれど、ネリーは長くいた人でしょう。

オルソン：ほかの二人も新人ではなかった。ナターシャは、私より前からブラック・マウンテン大学にいたし、ヘイゼルもそうだった。

レイノフ：ネリーはどんな人でしたか。

オルソン：元ライス夫人は……ウィリアムズ裁判官（Judge Williams）は、法律家で、ブラック・マウンテン大学を法人化した人だ。私をいくつもの法廷で助けてくれた。だから、たった一人の法律家しかいなかったのだ。アンドルー・ジャクソンの同族で、法律家で、裁判官で、偉大な南部人で、ノースキャロライナ州の西に住む、「レッド」ウィリアムズと呼ばれた人は、R. R. ウィリアムズ、シニアだった。その人が、初めから終わりまで、あらゆることを引き受けていた。ライス夫人がこういった最後のあがきをしている時、私に言った、「オルソン、君と理事会に助言するがね、保安官を呼んで、ライス夫人と彼女の持ち物を直ちに大学から外へ出したまえ」。ウィリアムズ裁判官が言うことはもっともだった。ライス夫人は、大学を裏切っていた。この件に深入りすると、驚くべき作家ルメイカー氏（Mr Rumaker）のブラック・マウンテン大学小説<sup>4)</sup>と張り合うことになるだろう。ライスは、自著『私は18世紀からやってきた』（*I Came Out of the Eighteenth Century*）の最終章でブラック・マウンテン大学について書いている<sup>5)</sup>。

レイノフ：ラーセンやゴルドウスキーは、妻たちにそんなことをさせたのでしょうか。

オルソン：二人とも経営陣に入った。あの狂った1949年から1950年にかけて、大学を運営しようとした。そしてブラック・マウンテン大学に、社会学部（a faculty of social condition）を設立した。1950年から1951年のことだ。2年の学長空位期間はあったが、上手くいかなかった。ナターシャは学長補佐のようなところがあった。ある人物が連れてこられた、ブラック・マウンテン大学の歴史の中で、学長が外から連れてこられるのは初めてだった——大変奇妙な名前の人だった（MaudによるとN. O. Pittenger）——学長がブラック・マウンテン大学を訪問する、そして学長不在の期間は、ナターシャが学長に代わって大学を運営するのである。ヘイゼルがその時期、財務を担当していた。彼女たちは、再起したブラック・マウンテン大学が失敗だと考えていた、1950年から51年に、M. C. リチャーズ（Richards）が教授会の議長になっていたときのことだ。演劇人としてハス氏がやって来ており、理事会の議長になっていた。それが経営陣だった。私はその時ユカタンから帰ってきた、1951年夏のことだった。ルー・ハリソン（Lou Harrison）が音楽の教師としてやって来た。

キャサリン・リッツ（Katherine Litz）はダンスを教えた。我々は、滞在し続けた。ハリソンもそうしたと思う。長く滞在するべく招かれ、そうしたのだ。突然、新しいブラック・マウンテン大学が現われた、経営陣も最後まで頑張るつもりだった。たとえ、私が代わって創作を教えることになり、それでM. C. が離れていったとしても。ブラック・マウンテン大学にいた人々は、何かを試そうとする人々だった。この大学で何かを得て、どこかへ行こうとする人たちだった。それに成功する人たちもいた。我々も成功したが、その成功は我々の求めていたものとは全く違っていった。いやいや、例外はなかった。何かを手に入れてここを出て行った人たちで、大学にあの種の未来をもたらした人達は、大学を訴えた三人の女性たちだけだと思う。レイノフ：では、ラーセンとゴルドウスキーは、付随給与のことを書く手先なのか。（*Muthologos* 332-35）

#### ix. オルソンとブラック・マウンテン大学

インタヴューの流れの中で、オルソンとブラック・マウンテン大学が関わるきっかけになった状況が語られる。

オルソン：そうではないと思う。そういうことをするのは、1949年から50年の教授会ではなく、1950年から51年の教授会だ。M. C. リチャーズとハスが、教授会の議長や理事会の議長をしていた時だ。その時に、私はブラック・マウンテン大学と絆ができた。アルバース＝ドライアー時代の終わりに。私は、アルバースとドライアーに招かれたのだ、ダールバーグ（Dahlberg）が辞めた後でね——わが友ダールバーグは、ブラック・マウンテン大学に行った、そしてブラック・マウンテン大学は都市の美術館でも都市の歩道でもなく、女性には手に入らない、それで退屈してしまった。だから、さっさと辞めて、出て行った。彼は、私に声をかけてみたらどうかと二人に言った。私はワシントンにいたので二人の誘いを断ったが、月に一度来てくれればよいということになった。私は、一年間、そうした。1948年から49年のことだ。1949年の夏のセッションに来てくれないかと頼まれた。私は妻と一緒にいった。それが、ゴルドウスキー時代の始まりだった。アインシュタイン（Einstein）の元助手で、ノースカロライナ大学の物理学者ローゼン（Rosen）がいたし、夏季セミナーでは、バックミンスター・フラー（Buckminster Fuller）が教えた。その時、その場の空気というものもあった。科学がトップになったという空気があった。つまり、科学的な、MIT的な種類の人々がトップになるのだ。ローゼンやゴルドウスキーよりも、MITにいるバックミンスター・フラーの存在感が強かった。だから、付随給与のことを書いたのは、別の教授会だ。1950年は幸せな年ではなかった。1951年も同様だった。大学がエネルギーを出せたのは、最後の6年から7年で、この時を私は第三のブラック・マウンテン大学と呼んでいる。（*Muthologos* 335-56）

#### x. バンコーム郡法廷

法廷で「付随給与」がどうあつかわれたのか。裁判官ウィリアムズ氏が大学の将来像を示唆してくれる。オルソンの頭の中にも「思考の大地」という新たな考えが芽生え始める。

レイノフ：バンコム郡法廷に来ましたね。付随する給与が未払いなので、その支払いを求めて五人が訴訟を起こしているのですね。で、どうなったのですか。

オルソン：訴訟には向き合わなければならない。M. C. リチャーズはニューヨークから美しいスーツを着てやって来た。私は髭を生やしていた。法律家は、再びウィリアムズ氏だ。郡法廷の裁判官の前に出るには髭をそった方が感じがよいと、助言してくれた。だが、私は、自分の旗を降ろすのが嫌で、一人で闘った。ハスはコースト（Coast）にいたので、自由には来れない。付随給与のことを書いたのはハスだったので、来てほしかったのだ。問題になることは分かっていた。曖昧さが付きまとったが、明らかにしなければならなかった。ブラック・マウンテン大学を受け継ぎ、世話をしているのだから、訴訟に対しても私が責任をもたなければならなかった。私は、56,000ドル払った。未払い給与に加えて、抵当やあらゆる借入金、それに贈り物の代金さえ、しかし、学生にお金を請求することはしなかった。学生の借金は、すべて清算した。全額支払った後でも、大学の場所を借りている金額は払えた。私は、サー・ウォルター・スコットのような人だった、一生かかって父親の負債を支払うのだ。わたしはただ、肯定的に言うて欲しかった、ブラック・マウンテン大学のリングは、大学のそばに植えられた木と同じく、最後もバラ色だったと。

レイノフ：法廷にいたのは……

オルソン：片方に三人の女性たちがいた。鳥の巣のような帽子をかぶったライス夫人、ゴルドウスキー嬢は、かつては素晴らしいロシアの物理学者だったが、逆立つ髪をしているだけだった。それにラーセン嬢。私は髭をたくわえており、リチャーズ嬢は朝早く、ニューヨークから、幸福そうにやって来た、学部長に見えた。それで私は、女性を一人、自分の味方につけた。ウィリアムズ氏がやってきて、ノースカロライナ州の法律によって、私が、権利財産譲受人（Assignee for the Benefit of the Creditors）になるよう求めた。大学の土地は使ってはならないと言われた。

レイノフ：破産した？

オルソン：いや、違う。結局同じことかもしれないが、違う。家庭内の争いに見えるものを法廷が解決しようとしてくれたのだ。実際、基本的には家庭内の争いであったものが公になった。突然、三種類の欲情した牝牛が、事を公にしたからだ。ウィリアムズ氏は、移動大学の可能性を示唆してくれた。勤務していた人たちが戻る場所として、ブラック・マウンテン大学を使いたかったが、その望みは絶たれたので、600エーカーの土地と13の建物、それに家畜やその他を売却して、この広い世の中のどこかに大学を移せないものかと考えた。だがそれでは、大学が存在しているとは見なされないだろうと、ウィリアムズ氏は考えた。ウィリアムズ氏は、ノルマン法によって（a Norman's law）、訴訟に先立って個人的に私を、学長兼理事長にした、私には二重の責任があった。ブラック・マウンテン大学のオーナーになったのだ。だから、この訴訟と法廷で闘い続けるかどうかは、私の手に委ねられたのだ。だが、私は既にこの財産（ブラック・マウンテン大学）とそれに加えて様々なものすべての唯一のオーナーになっていたのだ、微妙な立場にあった。

レイノフ：裁判官が、あなたを理事長に任命したのは、合法的なのでしょうか。

オルソン：ごまかしは、少しもないよ。逆に、ウィリアムズ氏は、ブラック・マウン

テンを、ブラック・マウンテン大学法人を守ったのだ。ブラック・マウンテン大学はしっかりと健康で合法的な、土地をもつ存在になった。どんな操作もなかった。

レイノフ：そんなつもりで言ったのではありません。

オルソン：合法とは言えないかもしれない。ノルマン法なのだよ。法律家たちの会議の後、裁判官ウィリアムズ氏が法廷の中を堂々と歩いて私の所へ来た。リチャーズ嬢を連れていた。その時、私にブラック・マウンテン大学の唯一のオーナーになってくれと頼んだ。権利財産譲受人（Assignee for the Benefit of the Creditors）になってくれるようにと。それで、私たちは合意し、大学の負債が支払われるまでは、何もしないことに決まった。私は、その役目を解決策として受け入れたのだ。法廷もそれで納得した。訴えた側とその他の者たちに対して約束する書類が書かれた。抵当や借入金を含むすべてに支払期限が記されており、支払いがすべて完了すると、ブラック・マウンテン大学は法廷から解放された。私が努力したのは、ブラック・マウンテン大学の存在を合法的にするためだった。もし、十分なお金があったなら、私はもう一度ブラック・マウンテン大学を設置できたのだ。破産というより、停止だった、活動の停止だった。

レイノフ：その任命には裏切りが含まれています。裁判官がそうしたのは、もっと上の裁判所であなたがそれに気づくようにしたのかもしれませんが。

オルソン：君が想像力によって何を提案しようと、実質（substance）は大事だ。私が、人生のエリキサーについての偉大な教訓を与えるとしよう。「思考の大地」（“thought-earth”）は「天国的心」（“heavenly heart”）が生ずるところにある。「間の家」（“middle house”）に。つまり、「思考の大地」なしで、実質は手に入らないのだ。そして「思考の大地」は、私がいた場所の一つだった……（*Muthologos* 336-39）

### Ⅲ. ブラック・マウンテン大学の未来

#### i. 将来像と「思考の大地」

オルソンの「思考の大地」という概念を見ておこう。

「思考の大地」という考えの全てで私が言いたかったことは、あの提案が周りにあった時のことだ、——1952年頃だ、ポール・ウィリアムズと、ニューヨーク州のストーン・ポイント（Stony Point）にいる集団が、北へ向かおうとしていた。私はその場所は、サター湖への道ほど遠いと思った。そして、ノースカロライナの山並みには、ブラック・マウンテン大学の土地があると思ったのだ。（*Muthologos* 339-40）

#### ii. 裁判の始まり

どういう状況で裁判の始まりをオルソンが知ったのかについては、以下を見られたい。

レイノフ：裁判は何年に始まったのですか。

オルソン：1957年の春だ。私はサンフランシスコで朗読をして、ブラック・マウンテン演劇を作るべく奮闘する人たちと会う機会をうかがっていた。劇団は、ダンカンのメディア三部作（Medea）の第二部を作っていた。その第一部が上演されると——私は呼び戻された。旅程を縮めなければならなかった、突如、法廷で訴訟が始まったからだ。それが1957年の春だった。

レイノフ：大学が閉校になり、14人が残ったのなら……

オルソン：ブラック・マウンテン大学は閉じられていなかった。我々は、前年の10月に、1956年10月に大学を閉じた。全員が早々と出て行った。そして、私と妻と子供がブラック・マウンテンに残った。10月から春までの間に、我々はサンフランシスコに行った。私は朗読する用事があったし、“The Special View of History”をもう一度サンフランシスコで講義する予定だった。私は1957年の春、サンフランシスコでブラック・マウンテン大学の教師として働いていた。演劇は行なわれ、雑誌も存続していた。

レイノフ：なぜ、全員が去ったのですか。

オルソン：われわれがブラック・マウンテンでの活動をやめることにしたからだ。私は、将来のための外面的事務手続きをするために残った。同時に、内面的に何ができるかを知ろうとした。

レイノフ：では、これは根本的な方針の転換だったのですね。（Muthologos 340-41）

### iii. 将来像：放送大学の構想

全く新しい大学の未来像を示唆したのは、ドライアー夫人だった。建物ではなく運動としての大学が提示される。

オルソン：完全な転換だ。ブラック・マウンテン大学の敷地にいる方針から、敷地を捨てて、どこへでも行くのだ。ドライアー夫人が、アンディ・オーツ（Andy Oates）、ブラック・マウンテン大学の卒業生、それに私とで食事をした。ボストンでのことだ。その時ドライアー夫人は言った。「ブラック・マウンテン大学をテレビ局に移したらどう（現在のボストン2チャンネルだ）。放送大学になるのよ（a university in the air）」と。1956年から57年にかけての冬のことだった。今から13年前だ。

レイノフ：大団円に行きたいと思います。それは、大学ですか、それとも組織なのですか？

オルソン：印璽、憲章、名称、法人、何でもよい。これらはすべて、実在したのだ。印璽はいまでも部屋にある。だが、憲章が見つからない。

レイノフ：大学が活動を停止しているなら、憲章は……

オルソン：私が残ったのは、するべきことがあったからだ。それが決めてあった。私はハスに言った。「これ以上活動してはいけない。」と。「OK、ではここを出て、野や空中で活動しよう」と。そう言って、教授陣は出て行った。この移住は見事だった。ヒジュラ（聖遷）だ。エクソダスではなく、脱出でもなく、終わりでもなかった。運動だった。1956年10月以来、ブラック・マウンテン大学は、運動になった。



(Muthologos 341-42)

iv. 法廷の命令：活動停止命令

法廷がオルソンに命じたこととその結果については、以下の通りである。

レイノフ：法廷があなたにノースカロライナ州での活動停止を命じたのですか。

オルソン：法廷が私に命じたのは、負債、抵当、ローン、および56,000ドルの付随給与が支払われるまで、活動を停止せよ、ということだった。

レイノフ：すべてを支払う訳にはいかなかったのですね。

オルソン：いや、まったく逆だよ。我々は給与を全額支払ってもらって解雇されたのだ。学生に未払い授業料を払えと言うことなく。その時点で、ブラック・マウンテン大学を生かしておく運動をしたくなかったほどだ。学生が授業料を払えば、それが基金となるとね。だが、1957年の夏には、大学の敷地はすでに売却されていた。私自身が売却の労を取ったのだった。「もう土地はない、空気は空気に任せよう」という態度を私は取っていた。そんな時、訴訟が法廷へ持ち込まれた。私が思ったのは、それについてどんなに頑張っても——理事会が命じたこと以外はできなかった。土地を処分して負債を返すことは、四つの指令のうちのひとつだった。四つの指令のうち一つは、あらゆる負債を返せ、だった。換言すれば、訴えようとしている女性たちを引き受けるということだ。1956年から57年の私の仕事によって大学の敷地は輝いたのだし、下の方の貸主であったピカリング氏（Ms Pickering）に下の土地も上の土地も売ることができたのだよ。

レイノフ：敷地の上に、新しい大学を作ろうとしてはいけないというのは、理事会の指示だったのですね。

オルソン：その通りだ。

レイノフ：後になって、大学を作ろうと、もう一度考える機会はなかったのですか？

オルソン：実際、なかった。私が唯一のオーナーになった瞬間に、理事会はすっかりなくなってしまった。その地での教育はなかった。それに、敷地を処分したが、私は負債の全て、抵当、ローンを支払える程度にしか儲けを出さなかった。(Muthologos 342-44)

v. 将来像：世界の発見へ

ブラック・マウンテン大学の課題を振り返ってみる。

レイノフ：ブラック・マウンテン大学が実際には続かなかった理由は、1956年以前にブラック・マウンテン大学の人々がすでに続けないと決めていたからではないのですか。

オルソン：ある意味ではそうだ。第三のブラック・マウンテン大学は、世界を見つけなくてはならなかった。例えば、『ブラック・マウンテン・レビュー』（*Black Mountain Review*）はマリョルカ（Mallorca）で印刷され、編集された。かつてのブラック・マウンテン大学との違いが分かるだろう。それが、「思考の大地」から一

歩踏み出すことだった。『ブラック・マウンテン・レビュー』を出した時、人々は、書くことが好きな人が読むだろう、そして、ついにはブラック・マウンテン大学へ来るだろうと考えた。『ブラック・マウンテン・レビュー』は夏季プログラムのよ  
うなものと見なされた。

レイノフ：どのようにしてブラック・マウンテン大学は世界を見つけたのですか。

オルソン：実をいうと、1956年までに世の中のギアが第2番ギアにシフトした。1970  
年から72年にもう一度、ギアがシフトすると思う。ギアは三段階だ。古いギア、  
1956年の新しいギア、そして1970年から72年の最後のギア。

レイノフ：では、次のギアは何ですか？

オルソン：次のギアね——そういう物を期待してはいけない。そういう物が生じたと  
きに、気が付かなければならないのだ。ブラック・マウンテン大学は、1951年に  
始めたことが、機能する場所として5年、あるいは6年間続いた、そして1956年に  
は自然と終わりが来たのだ。だが、ブラック・マウンテン大学は、ポール・ウィリ  
アムズの示唆を受けて、北へ向かい、摩天楼の中へ、ドライアー夫人の示唆を受け  
て、ボストンのラジオ局へ、と進んでいった。あらゆる種類の拡張 (expansion)  
がある。

レイノフ：手を広げる (reaching out) とは、タコの触手みたいですね。

オルソン：巢から飛び立つのさ。

レイノフ：分かりました。巢から飛び立つのですね。関わった人たちが、飛び立つと、  
ブラック・マウンテン大学は、倒れると考えませんでしたか。

オルソン：私は教授陣をまとめようとした。まだ知られていないピエール・ブーレー  
ズ (Pierre Boulez) を招聘しようとしたが、失敗した。ブラック・マウンテン大学に、  
アインシュタイン (Einstein)、画家のフランツ・クライン (Franz Klein)、詩人のウィ  
リアム・カーロス・ウィシラムズ (William Carlos Williams)、地理学者カール・O・  
サウアー (Carl O. Sauer)、ノーバート・ウィーナー (Norbert Wiener) からなる  
諮問委員会 (advisory committee) を持ちたい、と君に電話で言ったね。こういう  
人たちは、ブラック・マウンテン大学がさらなる活動することに協力してくれた。  
最後の3年間か4年間、私たちは、何であろうと、どんな意味であろうと、ブラック・  
マウンテン大学が前進することに全員、協力した。その委員会ができたのは、1956  
年だったと思う。

レイノフ：最後の3年間のブラック・マウンテン大学の目的が、外へ広がる (spread  
itself) こと、外へ出ていくこと (going out) だとしたら、その考えは、ブラック・  
マウンテン大学から出ていく人たちがいた結果なのですか。

オルソン：この問題には、我々が初めて正面から向き合っている。トニー・ランドロー  
(Tony Landreau) の素晴らしいプラン、移動大学 (the mobile university) は、書  
類になっている。ヴォルペの考えが元だった。教授陣はそのアイデアをほとんど  
冗談としか受け取らなかったが。私は、真剣に考えた、トニーも、そして、ハスも  
興味を持った。(Muthologos 344-46)

vi. 終局で：思考の大地は、土地が必要

思考の大地には土地が必要だとオルソンは言っている。

「思考の大地」が強靱であることを、その直感を私は強調したい。ブラック・マウンテン大学は、できる限り、自分の服を編み、星々を騒がせているだろう。ブラック・マウンテン大学の終わりは、その創設と同様、興味深い。人々が共通の土地から出て行ったときに、諸事を考えていた者が、その地に残った。そこが難しいところだ。だからこそ「思考の大地」は、地上になければならないのだ。アルバースが学長で、ドライアーが財務担当だった頃、食堂と研究棟をつなぐ道は、人間社会の素晴らしい往來のようだった。1948年から49年のことだ。（*Muthologos* 347）

vii. 回顧する：優秀な卒業生たち

オルソンは、優秀な学生たちを懐かしく思い出す。

オルソン：常に興味深いのは、非常に多くの学生たちが、世に出てから成功したことだ——ラウシェンバーグ（Rauschenberg）のような人や、知られていなくとも同じくらい重要な人もいる。その人は後にブラック・マウンテン大学の一部になった、ジョン・チェンバレン（John Chamberlain）だ、彫刻家だったと思う。今、芸術家になっているのは、ケン・ノーランド（Ken Noland）だ。アルバース時代の学生だよ。

レイノフ：私は、グッドマン（Goodman）の本でブラック・マウンテン大学を知りました。

オルソン：ポール・グッドマンは、学長空位時代の夏のセミナーにやって来て、教えた。空位時代の2年間、夏のセッションで教えたが、ポールは決してブラック・マウンテン大学の教師になろうとはしなかった。彼は、絶対にサーカスのテントの中に入らない外側の人間（rump）だった。ポールは、都市の人間で警官たちの所へ行くのが好きだ、それがブラック・マウンテン大学の教師に向かない理由だ。（*Muthologos* 347-48）

viii. 学生の要求：アルバースとドライアーの退職

アルバースとドライアーが退職した後のブラック・マウンテン大学について。

レイノフ：アルバースとドライアーが去った時の話をしているのですよね。ジャクソン（Jackson）という人物の話をしていましたね。

オルソン：ジャクソンは学生のリーダーで、学生の団体を組織した。しかし、数学教師としてのドライアーに辞職して欲しいと言ったのは、学生の団体だった。

レイノフ：数学の教師をやめてほしいと言った学生たちの行為を、侮辱だとドライアーは受け取りましたか？

オルソン：20年も大学に尽くしてきたからね。だが、アルバースも16年大学に尽くした。プライドの問題なのだ。教師をせずに、財務だけを担当しろというのか、と

いうわけだ。結局二人とも、辞めていった。ドライアーは財務担当として、非常に有能だった。そして、アルバースは赤字を埋めることに頭を使っているだけでは残念な知性の持ち主だった。夏のセッションでわずかな黒字を集めていたが、それにも限界があった。会計簿を見ると、毎年10,000ドルの赤字があり、ドライアーが財務を担当していた時は、寄付があって、それで赤字を埋めていた。ジャッピー（Juppie）つまり、ジョゼフ（Josef）は、そしてハスも私も、大学の敷地がなければ、どうやってお金を集めることができるか分からなかった。

レイノフ：ジャッピーは船を捨てたのですか？

オルソン：いや、違う。彼は分かったんだ。ドライアーは自分でブラック・マウンテン大学を去りたかったのに、辞めざるを得ない形で辞めた。ジャッピーも「私は去るよ」と言った。ジャクソン率いる学生の団体は、考えが足りないのだ。ドライアーを打てば、アルバースも倒れることが分からなかった。1948年にあったこの出来事を我々は乗り越えてやってきた。2年の空位期間の後、我々は大学をうまく運営できたと思う。

レイノフ：どうして、アルバースは去ったのでしょうかね。

オルソン：ライスが去ったとき、責任がドライアーとアルバースの肩に重くのしかかったのではないかと思う。理事会は常にあったとはいえ。

レイノフ：アルバースはジャクソンのような輩をねじ伏せたかったのではないですか？

オルソン：「君がドライアーを辞職させるなら、私をも辞職させることになるんだ」は、逆にアルバースを追い詰めたかもしれない。私は、もう少し共同体のために働いてほしいと言ったが、傷ついていた。私のタロット占いでは、アルバースはメキシコへ休暇に行き、その後イエール大学に就職がきまるのだ。（*Muthologos* 348-50）

#### ix. 終局を迎える頃の学生たち：1950年代の学生

インタヴューアールとオルソンの最後のやり取りを聞こう。

レイノフ：スタン・ヴァンダービーク（Stan Vanderbeek）は、大学が閉じるころになると、ブラック・マウンテン大学へ来る学生が実際に違って来た、と言っていました。

オルソン：ああ、ずいぶん違って来た。

レイノフ：喧嘩騒ぎやそれに類したいろいろなことで、教授陣は血まみれの鼻を手当てしなくてはならない、そういうところへ来ていたと、言っていました。

オルソン：だから、ブラック・マウンテン大学が現在の舌先（tongue）なのだ。学生たちは、いつでも新しい。常に違いがある。50年代のブラック・マウンテン大学の学生は、現在有名になっている世代だ。ブラック・マウンテン大学を閉じようと私が考えるようになったのは、嵐にあって構内に逃げ込んで来た猫の頭に穴が開いていたからだ。雨がひどく降っていたので、猫の血は洗い流されており、頭蓋骨の一部が露出していた。道で自動車にはねられ、3マイル歩いて大学構内にたどりついたので。「こんな事故に煩わされたくない」と私は思った。退役軍人たちが、ま

たやって来ていた。退役軍人用の病院もあった。私は、ジョー・フィオレ（Joe Fiore）に言った、「君はジープを持っているね。乗客が一人増えたよ！」と。我々は再び丘を下り、退役軍人用の病院に人々と猫を（bodies）運んだ。

朝鮮戦争の後、新しい種類の学生たちがこの共同体へ入ってきた。40年代生まれの有名な「戦争ベビー」の世代が、キャンパスに姿を見せるようになったのだ。実際、あの雨の夜、事故を起こした学生の友人の中には16歳の者がいた。ロンドンの空襲から逃げてきたのだ。ブラック・マウンテン大学へ、わざわざ入学するような者は、どこか、変わっているか、気が変か、集中力を発揮する可能性のある学生だったのではないか？（笑う）初めからブラック・マウンテン大学へ来る者がいたのだろうか。何が人々をブラック・マウンテン大学に引き寄せたのだろうか。私が言い続け、考えているのは、中心的ランナーがいることが、きわめて重要だということだ。つまり、初めから終わりまで、カリキュラムがブラック・マウンテン大学の支えだった。ブラック・マウンテン大学には、カリキュラムがあり、カリキュラムを変えることもあったのだ。

**レイノフ**：50年代にブラック・マウンテン大学へやって来た学生たちは、気ままで、問題を起こしそうな連中だったとしたら……

**オルソン**：そうではなかった。彼らは、今日までつづく若者の典型だよ。彼らはその初めの、最も早い例だった。扱い方の分からない若者（the unformulated young）と同じだ。

**レイノフ**：続いて起こったことも。

**オルソン**：夏にベン・シャーン（Ben Shan）が教えた後のブラック・マウンテン大学に、スタンがいたとは信じられない。スタンは、ポール・ウィリアムズが1952年にケープ・コッドに建てたAハウスに住んでいた。つまり、1951年の秋には出て行ってしまっていた。1951年の夏のセッションによって、新しい秋学期が始まった、大学の動きが創り出され、それが最後まで続いた。スタン・ヴァンダービークに耳を貸してはいけぬ。彼は、何が起きているのか知らなかったのだ。（*Muthologos* 350-52）

#### Ⅳ．未来の軌跡

インタビューによって、時代の空気まで伝わる気がするが、ブラック・マウンテン大学の未来については、オルソンの回答が一貫していないように思われる。

- (1) 他の土地へ移動するより、ブラック・マウンテン大学の敷地で、倒れるなら倒れるがよいとする考え方
  - ・Ⅰ章 i 節：終局の選択（ポール・ウィリアムズの考えに対して）
  - ・Ⅰ章 v 節：最終局面での選択（ポール・ウィリアムズの考えに対して）
  - ・Ⅲ章 i 節：将来像と「思考の大地」（ポール・ウィリアムズと北へ移動するか否か）
- (2) 敷地や建物がなくとも、運動として大学は成り立つとする考え方



- ・Ⅱ章iv節：将来像（トニー・ランドローの移動する Black Mountain College 構想）
- ・Ⅱ章x節：バンコーム郡法廷（ウィリアムズ裁判官のBMCを移動大学にする提案）
- ・Ⅲ章iii節：ブラック・マウンテン大学を放送大学にする（ドライアー夫人の案）  
→大学の敷地を捨て、運動そのものにする。「1956年10月以来、ブラック・マウンテン大学は、運動になった」（*Muthologos* 342：本稿72頁参照）

上記2つの考え方の両極で、オルソンは揺れている。章と節の数字が示すように、初めのうちは断固（1）の態度をとっていたオルソンだが、次第に（2）の方へ気持ちが動いていくのが分かる。ブラック・マウンテン大学の歴史を振り返りながら、オルソンはこのような暫定的結論を出していた。

すでに引用したところだが、もう一度、引用する。

ブラック・マウンテン大学は、1951年に始めたことが、機能する場所として5年、あるいは6年間続いた、そして1956年には自然と終わりが来たのだ。だが、ブラック・マウンテン大学は、ポール・ウィリアムズの示唆を受けて、北へ向かい、摩天楼の中へ、ドライアー夫人の示唆を受けて、ボストンのラジオ局へ、と進んでいった。あらゆる種類の拡張（*expansion*）がある。（*Muthologos* 345：本稿74頁参照）

敷地がなくなった以上、移動するか、放送大学になるか、そのどちらかを選択しなければならない。インタビューの進行に従えば、（1）であった考えから、（2）の方へ近づいていくのが筋だ。しかし、敷地は必要なのである。Ⅲ章vi節「終局で」をご覧ください。

ブラック・マウンテン大学の終わりは、その創設と同様、興味深い。人々が共通の土地から出て行ったときに、諸事を考えていた者が、その地に残った。そこが難しいところだ。だからこそ「思考の大地」は、地上になければならないのだ。アルバースが学長で、ドライアーが財務担当だった頃、食堂と研究棟をつなぐ道は、人間社会の素晴らしい往来のようだった。1948年から49年のことだ。（*Muthologos* 347：本稿75頁参照）

「思考の大地」という一見抽象的な概念も、大学の敷地があつてこそ、有効なものになる。大学の敷地は、教育と研究のために提供される空間であるが、それだけではない人間的な機能を持っている。そのことを上の引用は示している。さらに、教育や研究と一見無関係なもの、何でもよいようなものへの同志愛のようなものがある。

ブラック・マウンテン大学から去るための荷造りを終えた日に、君に電話で言ったのだ。私は思った——目に見えるのはいくらかの草と一本の茎、それがすべてだと。残ったのはそれだけだった、と。言いたいのは、ブラック・マウンテン大学は、そういう物と一緒に始まったということだ。毒ヘビの巣のそばに生えていた一本の茎や、野生のアスパラガスとともに。君に言ったように、ブラック・マウンテンは私の心にとっては、過去のものであるだけでなく、未来に掲げられている旗で、まだ降ろされては

いないのだ。(Muthologos 319：本稿58-59頁参照)

大学の敷地の草や茎とともに生きたという感受性を持つ者にとって、敷地を持たない大学を「運動」として存続させるのは、観念的にはともかく、実際には無理があった。過去のものであるはずのブラック・マウンテン大学が未来を含んでいるのであれば、未来の同大学のために過去をすてることはできない。過去に含まれた未来をも捨てることになるからだ。

オルソンは、確かにきっぱりと（2）の方向に舵を切ってこう述べた。

私はハスに言った、「これ以上活動してはいけない」。「OK, ではここを出て、野や空中で活動しよう」, そう言って、教授陣は出て行った。この移住は見事だった。ヒジュラ（聖遷）だ。エクソダスではなく、脱出でもなく、終わりでもなかった。運動だった。1956年10月以来、ブラック・マウンテン大学は、運動になった。(Muthologos 342：本稿72頁参照)

しかし、この宣言は、敷地を使えなくなったブラック・マウンテン大学が、次のステップを踏み出すために案出した苦肉の策である。敷地を必要としない放送大学案に活路を見出そうとする覚悟の背後には、哀しみと背伸びがある(Ⅲ章Ⅲ節、「将来像：放送大学の構想」, 本稿72頁参照)。

こうした「拡張」路線に対してはインタヴューアのレイノフさえ、首をかしげている。敷地から離れ、電波となって「拡張」することは、われわれがインタヴューを通じて知ったブラック・マウンテン大学の在り方とは、馴染まないのだ。

## V. 非所有の原理

ブラック・マウンテン大学の在り方とは、初代学長ジョン・ライスの物を所有しないという方針と関係がある。常に財政の苦しかったブラック・マウンテン大学は、大学教育により、経済的な利益を上げようとはしなかった。所有を嫌ったのである。

設立者の考えに戻れば、ともかくブラック・マウンテン大学は、物を所有してはならないのだ。だから、物を購入した瞬間、ブラック・マウンテン大学は自らを傷つけることになる、それも存在している間ずっと。つまり、ライスには、自分が関わり、その良さを信じられるレベルの教育活動を行うには、借りるが最良の原理だったのだ。  
(本稿58頁参照)

所有するのではなく、借りること、経済的豊かさよりは、貧しさを選ぶこと、こうした態度が、インタヴューのいたるところでブラック・マウンテン大学の特徴として、紹介されていた。ブラック・マウンテン大学をアルバースが退職するとき、こう嘆いた「20年以上も努めたのに、手元には何も残らず、去っていくとは」(本稿57頁)と。経済的安心感を与える大学でないことを、オルソンは、こう語る。

ブラック・マウンテン大学では、安心していられなかった。年金の基金もなかったし、どんなテニユア（終身在職権）もなかった。いや、絶対のテニユアはあった！（笑う）在職する限り、給与はもらえた。（本稿65頁参照）

経済的にも精神的にも安心してられない状況と実験性は、表裏一体だった。アルバースの嘆きは、教師間の平等として捉えられるのである。長年いる教師も先週から働き始めた教師も、同等の権利を持つ、そういう開かれた状態の大学だった、とオルソンは語っていた（本稿57頁参照）。

未払い給与の件で大学を訴えた三人の女性について、オルソンは、大学が経済的に潤沢ではなかったから、給与支払いは遅れた、「付随給与」は実態のない名称だけの給与だと、説明した。だが、法廷の命令により、要求された金額は、支払った。そう説明しながら、こう語る。

学生がお金を払えば、ブラック・マウンテン大学はお金のかかる大学になる。学生がお金を持っておらず、学生だと主張すれば、ブラック・マウンテン大学は学費ゼロの大学になる。そういうバランスがある。問題の三人の女性は、「自分を馴らすことができなかった」のだ。（本稿68頁参照）

初代ブラック・マウンテン大学学長ライス、二代目学長アルバースの精神を、三代目学長オルソンは、見事に受け継いでいる。それは、所有物や金銭、そして地位の与える特権に捕らわれない貧しさと純粋さの可能性である。

## おわりに

この回顧録（Ⅱ）は、ブラック・マウンテン大学の終焉の相に焦点を当てている。大学閉校措置は、給与及び付随給与の未払いを、創設者ジョン・ライスの妻ネリー、物理学者ナターシャ・ゴールドウスキー、写真家ヘイゼル・ラーセンの三人が法廷に訴えたことがきっかけとなった（本稿67-68頁参照）。三人の女性は、付随給与が名目だけの給与であることを知らなかった。しかし、法廷は付随給与を未払い給与と共に支払うよう、オルソンに命じたのである。

この訴訟事件が大学を閉じる引き金になったのだが、オルソンは三人の告訴者を責めてはいない。ブラック・マウンテン大学に新たな未来をもたらした人たちとして評価している（本稿69頁参照）。

ブラック・マウンテン大学にいた人々は、何かを試そうとする人々だった。この大学で何かを得て、どこかへ行こうとする人たちだった。それに成功する人たちもいた。我々も成功したが、その成功は我々の求めていたものとは全く違っていた。いやいや、例外はなかった。何かを手に入れてここを出て行った人たちで、大学にあの種の未来をもたらした人たちは、大学を訴えた三人の女性たちだけだと思う。

手放して評価しているのではないことは、オルソンの口ごもるような口調に現われている。

引用1—2行目をご覧いただきたい。もともとブラック・マウンテン大学は、そこで得た何かを生かして、別のところで生きていく人たちのための大学である。学生ばかりでなく、教師も何かを得て、別の大学へ移っていく。それに成功するのは、よいことなのだ。

引用3行目「われわれも成功した」は、最後までブラック・マウンテン大学に残った教師たちが、訴訟を生き延び、新たな方向に大学を動かすことができたという意味であろう。しかし、「その成功は我々の求めていたものとは全く違っていた」のならば、「敗北」したと言う方が事実に近い。この訴訟の後、ブラック・マウンテン大学は敷地を失い、再起不能になったのだから。ルメイカーならば、「我々も成功した」と言うオルソンの発言に「救い難い楽観」(incurable optimism)を見るだろう(Rumaker 590)。ルメイカーの目には、1955年時点で既に「ブラック・マウンテン大学は、オルソンの精神的な兄弟メルヴィルのピークオッド号(the Pequod)同様、呪われているように見えた」(Rumaker 590)のだから。

訴訟事件も、元はと言えば、ブラック・マウンテン大学の経済基盤が常に弱く不安定だったことによって起こったものだ。学生数もわずかで、経営は恒常的に苦しかった。利潤を追求しない点はよくとも、組織としては経済的に不安定であった。教員への給与も正しく支払えないことが続いた。訴訟事件が起きても不思議はなかったのである。だから、オルソンが三人の女性を責めないのは、正しい。われわれは、そういう大学が23年間もの長きにわたって存続したことに、驚くとともに、複雑な感動を覚えずにはいられない。

## 注

テキストは、Charles Olson, *Muthologos: Lectures and Interviews*. Revised Second Edition. Edited by Ralph Maud. Talons Books, 2010. を使用する。

- 1) 『人間関係学研究』第13号(2014), pp. 95-120 参照。この時、テキストとしたのは、Charles Olson, "On Black Mountain" *Muthologos: The Collected Lectures and Interviews*. Vol. II. Edited by George F. Butterick. Four Seasons Foundation, 1979 である。
- 2) Butterick 版には、"On Black Mountain (II)" は載っていない。ラルフ・モードが『ミュソロゴス』の改訂版を作る際に、Olson: *The Journal of the Charles Olson Archives* 8 (Number 8, Fall 1977) pp. 66-107 のインタビュー記事を、収録した。それが、"On Black Mountain (II)" である。
- 3) アレクサンダー・トロキー (Alexander Trocchi) のシグマ運動 (Sigma Movement) とは、革命的な運動で、プロジェクト・シグマ (Project Sigma) のこと。トロキーはこのプロジェクトに1960年代の大部分を捧げた。シグマの目的は、「不可視の反乱」("the invisible Insurrection") を起こすことにある。それは、文化的に目覚めた者が「表現の格子と精神の発電所」("grids of expression and the powerhouse of the mind") を支配することである。トロキーはスコットランド人で、小説『カインの書』(*Cain's Book*) の作者として知られる。James Campbell, "Alexander Trocchi: The Biggest Fiend of All." *Antioch Review* Volume 50, Number 3, Summer 1992, pp. 887-900. とりわけ p. 891 参照。
- 4) Rumaker, Michael. *Black Mountain Days: A Memoir*. Spuyten Duyvil, 2003, 2012.
- 5) Rice, John Andrew. *I Came Out of the Eighteenth Century*. 1942 U of South Carolina P, 2014. pp.314-41.